

F Dシンポジウム

平成28年度授業改善シンポジウムに参加して

家政教育講座・竹下浩子

1. シンポジウムの概要と感想

平成28年10月27日（木）14:30から16:00まで教育学部本館2階会議室にて、平成28年度授業改善シンポジウムが開催された。今年度は、「地域を核として教育研究をつなぐ」という題目であった。地域に根差した教員養成が重要視される中、どのような手段でそれが可能となるのか、3つの話題提供者の事例から考えることができた。

佐藤栄作先生の「『坊ちゃん』のことでなんて、何も知らなかった」では、自分の研究テーマと社会が求めている大学教員との間の差をどのように折り合いを付けて行くかという、先生ご自身の体験から、教育学部教員としての生き方を考えさせられるものであった。

中野広輔先生、榎木暢子先生の「標準的な教育制度ではドロップアウトする危険性が高い児童生徒に対する学習支援の拠点形成プロジェクト」では、一般的な学校とは違う教育現場での事例を知ることができた。個々への支援という点で、普通教育にも求められる支援のあり方の先を行っている先生方の取り組みは、学校と家庭だけでなく、病院、教育委員会、大学、地域資源（博物館、企業など）との様々な連携によって可能になることが分かった。やりたいという子どものニーズに、様々な関係者とサポートして実践していくことの大切さを改めて実感した。

福井一真先生の「『つくりたいものをつくり隊』キックオフ・プロジェクトの基礎

的研究 I に関する取組報告」では、同じく実技を含む科目担当教員としての立場から、自分自身の抱える問題点と重なり、大変興味深かった。ものづくりに必要な道具をじょうずに使いこなせない教員養成課程の学生の現状や、美術への専門性がないことに不安を抱える現職教員や教員への研修プログラムの充実を臨む現役教員が多いという実態から、教員養成課程のカリキュラムと学校との連携を構築していく必要性を感じた。限られた授業時間の中で、設備を充実させ、実技を通して子どもの技能をどのように伸ばしていくべきか、家庭科との共通性が多くあり、ヒントを得ることができた。

2. 地域を核として家政教育研究をつなぐ

家政学、家庭科教育はもともと地域とのつながりがとても強い教科である。そのため、地域や学校との協働による学びの体制は多くある。

しかし、地域とつながるためには、その難しさもたくさんあることを自覚している。様々な連携は、支援体制を整え、子どもの学びを魅力的な方法で発展させることができ、またそれによりつながる人々の間にも資質能力の向上など、様々な相乗効果が期待できる。一方で、生活背景や活動に参加する動機など、関係する人々のバックグラウンドの違いから、なかなか意思疎通が図れなかったり、軋轢が生まれることがある。それを解消するためには、対話が必要であり、一度だけで終わるのではなく、継続した活動にするための振り返りを全員で行って行く必要がある。大学教員に求められるのは、ファシリテーターとして当事者同士をつなぐことであると考えている。